

<講演抄録>11. 歯の先天性欠如が顎顔面形態に与える影響 : Dental age III B~C期において(第12回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	佐藤 亨至, 三谷 英夫
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	7
号	1
ページ	93-93
発行年	1988-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/31290

長を示し、従って、上顎骨の前方成長の抑制を行えば、上下顎間の前後のバランスは良好になると思われた。一方、下顎骨が後方に位置する群においては、下顎下縁平面の傾きの如何にかかわらず、下顎骨の前方成長はあまり期待できず、従って、下顎に上顎を合わせ、上下顎共後方位をとる治療にならざるを得ないものと考えられた。今後は、積極的に下顎骨の前方成長を促進するような装置を試みる必要もあるように思われた。種子骨発現後に治療を開始した症例では、骨格的に CI II パターンが残り、dental compensation の量を、大きくせざるを得ないようであった。故に、上顎骨の前方成長を抑制するため、可及的早期に治療を開始すべきであると考えられた。

本研究の結果から、成長期にある上顎前突症の治療においては、まず、骨格パターンを認識し、それによって下顎骨成長方向の評価を行い、それに対応した治療方針をたてる必要性のあることが指摘できた。

11. 歯の先天性欠如が顎顔面形態に与える影響 —— Dental age III B~C 期において ——

佐藤亨至，三谷英夫（歯科矯正）

矯正臨床において歯の先天性欠如（以下先欠）を有する患者では、良好な咬合を形成する際の制約となることが多く、治療計画を立案する際に十分な考慮を払う必要がある。そこで本研究では、歯の先欠が顎顔面形態にどのような影響を及ぼしているかについて検討

を加えることによって、治療計画の立案に対する基本的情報を求めることとした。

資料は、智歯を除く 4 歯以下の歯の先欠を有する Hellman の Dental age III B~C 期の日本人女子 54 名（平均年齢 11 歳 2 カ月）の側面頭部 X 線規格写真である。

方法は、歯の欠如部位によって分類した後、側面頭部 X 線規格写真上で線・角度計測を行い、その平均値と平均顔面図形より比較を行った。また、主成分分析も併せて行った。

結果は以下の通りであった。

1. 上顎先欠群は、下顎先欠群に比べて、上顎中切歯が舌側傾斜を示して後退し、それに伴って咬合平面は時計回りの回転を示すものの、骨格系には両群間に著明な差異は認められなかった。

2. 前歯先欠群は、臼歯先欠群に比べて下顎骨体長がわずかに小さく、下顎枝後縁平面の前方傾斜、下顎角の開大傾向が認められた。

以上のことから、片顎における先欠は必ずしも上下顎骨の骨格関係に不調和を起こすものではないが、先欠の部位によっては、それが前歯部か臼歯部かによって、特に下顎骨形態に差異をもたらす傾向があることが示された。しかし一般に先欠が少数歯の場合には骨格系に与える影響は軽微であり、その影響は歯系に留まることが多いと結論できた。